

第28回雁鳴きフォーラム（大阪）概要記録

日 時： 平成27年2月15日（日）13:00～17:00

場 所： 大阪産業創造館 6階会議室A

語り手1： 長谷川 賢二さん（大阪大学27期 文学部）

話 題： 「博物館学芸員の日々 ―徳島での四半世紀を顧みて―」

語り手2： 秦 智さん（13期 インド・パキスタン語学科）

話 題： 「居合わせたインドの大事」

出 席： 田中健次（1期、以下敬称略）、加納巖（1期）、小原一浩（2期）、鎌田敏彦（3期）、武藤誠四郎（3期）、北村欣三郎（7期）、岡村 眞（10期）、小島久美子（10期）、木野下 章（13期）、山下清治（13期）、秦 智（13期）、木野下章（13期）、田中宏（13期）、三浦あつ子（13期）、岡本肇子（13期）、吉崎真樹子（35期）、岡村敏治（42期）、卜部 格（阪大8期）、秋山 修（同10期）、長谷川賢二（27期）、井内 健（同31期）、越智雄介（同58期）、細谷隆文（同58期）

語り手1： 長谷川 賢二さん（大阪大学27期 文学部）

あいつぐ事故で苦難のWV現役時代を乗り越えられた長谷川さん。その逆境で鍛えられた強靱な精神は、徳島県立博物館の学芸員のお仕事にいかんなく発揮されました。地元の人たちにとって面白い博物館とするために数々の新機軸をうち出されています。使命にひたすら耐えるのではなく、自身もそこに楽しみを見出す努力を続けておられたからこそ素晴らしい成果につながったのだと思います。それはWVの活動原点でもありました。

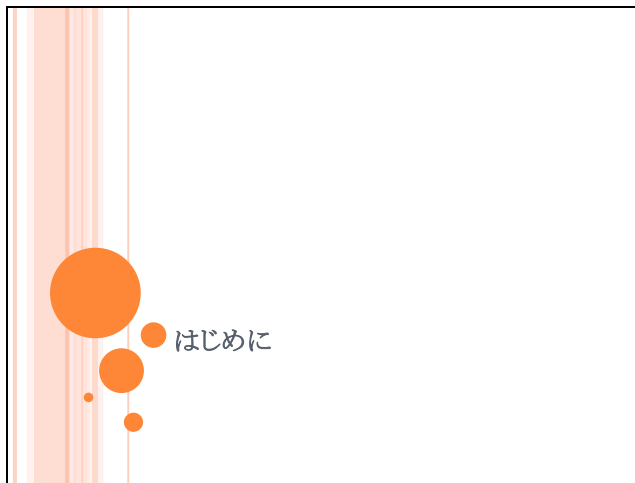
「博物館学芸員の日々 ―徳島での四半世紀を顧みて―」



1

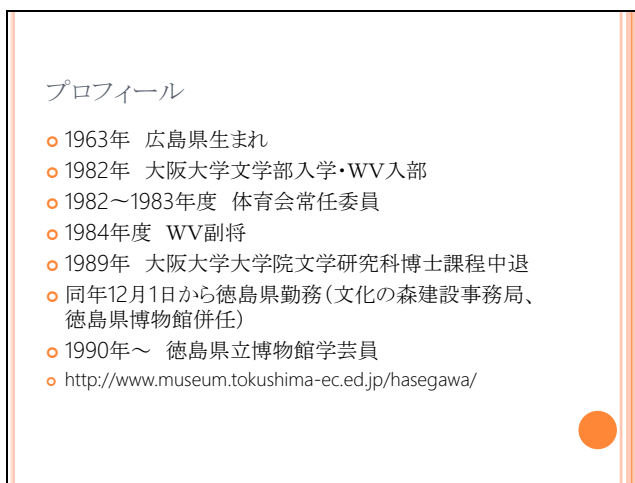


2



- 大阪から徳島に移って 25 年。仕事をのぞいて大阪に来ることはほとんどない。外大への関心もあってこのフォーラムにやって来た。
- 家族には出張、仕事みたいなものと言いついて出てきた。
- 学芸員の仕事は時として過酷なことがある。昨年は大きな展示の仕事があって、3～4 か月間休みがとれないこともあった。

3



- 「生活費がかからない」という甘い言葉に誘われて WV 部に入部した。が、実際はそんなに甘くはなかった。
- やめよう、やめようと思いながらタイミングを逃してしまった。
- 徳島県の新博物館開設に伴う学芸員公募があって現職を得た。
- 恩師の「チャンスはどこにあるかわからない。受けるだけ受けてみよ」との言葉に押されて受けた。

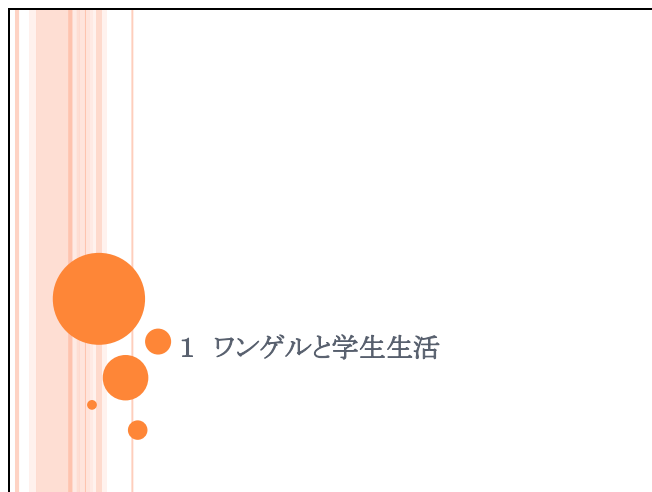
4



• 職場の個人ホームページである。

<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/hasegawa/>

5



• 在部したのは、阪大 WV 部のどん底の時代であった。部員数が少なかった。一緒に入って最後まで活動したのは 7 人。

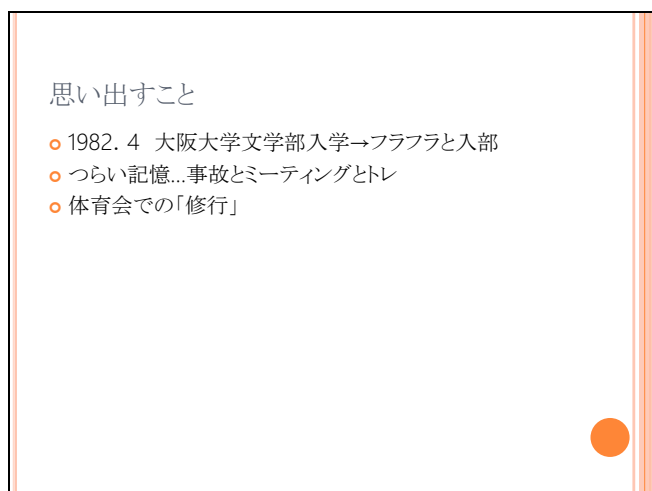
• 事故が重なった。

• 1 年夏合宿前にデボ隊が事故。

• PW で主将が亡くなる。

• 2 年春合宿で 1 年生が亡くなる。

6



• 事故が相次いだので活動らしいものの、自慢できるものがあまりない。

• 反省と体制改革のミーティングの毎日であった。外部から「ミーティング部」と揶揄された。山にもどこにも行けず、それでも、いつでも再開できるよう、昼は走ってばかりいた。身体をいじめるのが好きに見えたのか「SM クラブ」とも。

7

一番強烈な思い出は...これ↓



1982年 夏PW 親不知から白馬岳へ

- 1 年は夏合宿なし。夏合宿経験は 2 年だけ。3 年は膝を痛め現地本部。
- 3 年夏合宿の集結後に車の横転事故まであって散々であった。
- その意味で WV はろくなことがなかった。
- 一番の思い出は 1 年夏の PW（親不知から白馬岳）。
- 大阪駅で買った弁当を翌朝食べて食当り。この写真ではすでにやつれている。白い T シャツが私。

8



- 嘔吐しながら登り始める。幸いにして白馬山頂でご来光を拝むことができた。来てよかったと感動。
- まともな活動の面白さを知った。
- WV については、「いろいろあった、大変やったな」というのが実感。
- 1 年半ほど、「人身御供」として体育会常任委員。WV とは違う活動をやっている人との接触があり、得るものがあった。自分の世界を広げる機会にもなった。

9

得たもの

- 打たれ強さ、厚かましさ、食欲さ
- 議論の大切さ
- 後の研究とのつながり
山の信仰・宗教的世界への興味の芽生え

- 得たものを一言で言えば、理不尽さに対する打たれ強さである。
- 一方で、厚かましさと目的に向けて猛進する食欲さを身に着けた。
- すべて今の勤めで活かされている。
- 活動は協議して創った。議論する大切さを学ぶ。最後は声の大きい者、口数の多い者が制圧するようなどころもあるが...
- 最初に連れていかれたのが比良山。山に広がる宗教的な世界を間近に見る。後の研究テーマにつながる。

ワングルの外側

- 3年 専攻分属→国史研究室(現・日本史研究室)
- ワングル>勉強...欠席だらけ、失望感、無力感
- 4年 卒論に向けての研究→研究室通い
民俗学・文化人類学における日本研究への興味
- 大学院
 - ・迷い道...将来への不安と定まらない焦点
→伊吹山麓 大原観音寺文書の調査と写真整理
→修験道史研究へ
→学界の「傍流」、史料が少ない
 - ・修士論文→失敗
 - ・博士後期課程で勉強のやり直し
→修験道を通して中世を考えるというスタンス

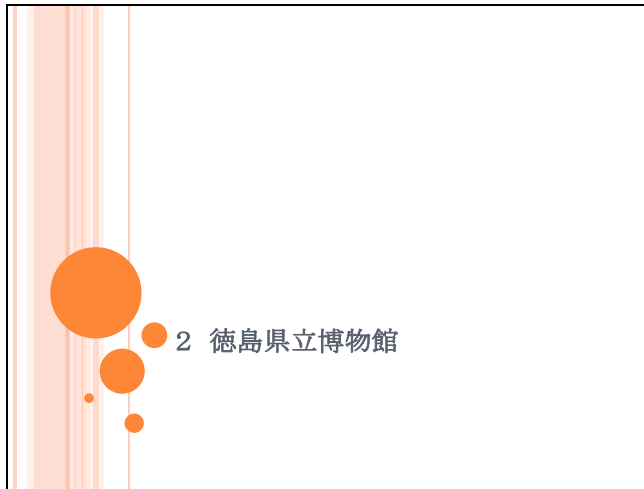
- ・3年に国史専攻を選ぶが、ろくに授業にも出ず、部室通い。
- ・研究室にいても失望感、無力感に襲われ、部室で山のプランを練るほうが楽しかった。
- ・4年からは卒論もあり真面目に通い始める。北陸の白山信仰をテーマに日本中世史について書く。
- ・大学院に入り、山の宗教、修験道史をテーマに選ぶが、先生におこられてばかり。前代未聞の院生とまで。
- ・大学院1年の時に携わった伊吹山山麓の大原観音寺の文書調査をきっかけに自身の道が見えてきた。
- ・当時は、研究者の少ない分野であり、学会でも肩身が狭かった。

博物館とのかかわり方

- 博物館初体験
小3 伊丹市立博物館開館
- 1980年代 歴史学と歴史展示の変容と魅力
荘園絵図、社寺参詣曼荼羅、妖怪など
大阪市立博物館、兵庫県立歴史博物館など
- 史料の少ない研究分野、新しい研究の模索
→何でも見てやろう
- 1989年夏 徳島県で建設中の文化の森総合公園内に開設される博物館の学芸員(中世史専攻)の公募
→迷った末にエントリー

- ・伊丹市に住んでいた小学校3年の時に伊丹市役所の横に図書館と博物館の複合施設ができた。図書館のついでに無料で博物館を見学できた。これが博物館の原体験である。
- ・私の学生時代は、歴史学(文献史学)で絵図や考古資料が援用されるようになり、展示の方法が変容した時代。
- ・兵庫県立歴史博物館で妖怪の展覧会が開かれ驚く。当時、妖怪に関心があり、当時は阪大におられた(現在は京都の国際日本文化研究センター所長)小松和彦先生の授業や研究会に出入りしていた。
- ・修験道は史料の少ない分野であり、これだけでは生きていけない。新しいテーマを探した。

12



- 学部の時に教員免許と学芸員の資格はとっていた。
- 折しもバブル全盛期。受験産業に食いついていたら講師アルバイトで結構生活ができた。
- 1989 年の夏に徳島県が中世史専攻の学芸員の公募が出た。
- 徳島県には縁がなかった。徳島の中世を調べてもこれといった史料がなかった。
- 博物館学芸員の募集は、考古学、近世史、美術の 3 部門が主流。中世史での募集は珍しかった。
- 四国は小学校（当時は岡山に住む）の遠足で栗林公園に行ったのみ。
- 1982 年に年の山として、同じ標高の石鎚山に行く計画であったが事故の関係で中止となった。
- 迷ったあげく応募。面接で徳島の印象を聞かれても返答に困るほどであった。

13

徳島県文化の森総合公園

- 1980年 文化の森構想発表
- 1990年11月3日 置県100年記念のモニュメントとして設置
- 都市公園＋県立文化施設（図書館、博物館、近代美術館、文書館、二十一世紀館）
- 2010年11月3日 鳥居龍蔵記念博物館開設
- 2015年 開園25周年！

※ 1871 徳島県
 1871～1876 名東県
 1876～1880 高知県
 1880～現在 徳島県

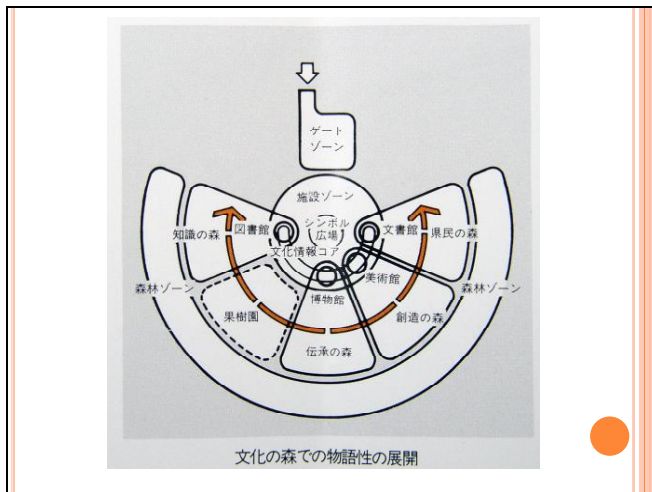
- 徳島県は 1880 年に設置。それまでは、現在の香川県や高知県と統合されていた時期がある。
- 県立博物館は、置県 100 年記念事業の一環としてできた文化の森の一角にある。
- 老朽化していた図書館と博物館の移転新築と美術館の新設。文書館と 21 世紀館（文化情報センター）を合わせ計 5 つの施設からなる。2010 年には鳥居龍蔵記念博物館を開設して 6 館に。
- 1990 年 11 月 3 日、文化の日にオープンした。今年はそれから 25 年目の節目の年になる。

14



- 公園と文化施設の複合施設。
- 私が来た時は、徳島県人口 82 万人、今は 70 万台に落ちている。そのうち、25 万人ほどが徳島市に集まる。
- 徳島県は県内での地域意識が他県よりも薄く、大規模施設をこのように集中させても地域的なアンバランスを問題としない傾向がある。

15



- 施設全体の機能連携イメージ図。

16

徳島県博物館と徳島県立博物館

- 1959年 徳島県博物館開館...募金
cf) 1964年 徳島県立鳥居記念博物館開館
- 1980年 文化の森構想発表
- 1984年 徳島県立博物館基本構想報告書
- 1990年 徳島県博物館廃止

- 県立博物館の前身は、県民の募金運動でできた県博物館。当時の徳島県は財政再建団体。博物館がほしいという県民の熱意でできた。さだまさしの小説『眉山』の舞台、眉山のふもとにあった。ロープウェイ乗り場の上にあった。
- 収蔵庫もまともになく屋上にプレハブがあった。私は採用当初数か月間、収蔵品の移転・処分作業に汗を流した。

17



•この写真に見るように、米の風選を中学生が実習・手伝いし、駄賃は博物館づくりに寄付するというような努力を重ねて県博物館ができた。

18



•当時の徳島県博物館。右がロープウェイ乗り場。左の1階と2階は物産館。その上に県博物館があった。徳島県にはじめてできた本格的な博物館。

19

徳島県博物館と徳島県立博物館

- 1959年 徳島県博物館開館...募金
cf) 1964年 徳島県立鳥居記念博物館開館
- 1980年 文化の森構想発表
- 1984年 徳島県立博物館基本構想報告書
- 1990年 徳島県博物館廃止
- 同年 文化の森開園、徳島県立博物館開館

•これまでの県博物館ではだめだと、文化の森構想にのっかって新たな博物館構想が1984年にでき、90年に施設が実現した。

20

徳島県立博物館の概要

- 人文系と自然系からなる総合博物館

○ 組織

館長(学芸員:考古 1)

副館長(事務 1)

企画担当(事務:教員2)

自然課(学芸員:動物2、植物2、地学2)

人文課(学芸員:考古1、歴史2、民俗2、美術工芸1)

- 一般の県立博物館としてはそれほど大きくないが、県の財政規模からみればよくぞつくってくれたという規模と内容。
- 私は人文課歴史担当の学芸員。

21



- 近代美術館、二十一世紀館、鳥居龍蔵記念博物館と同居した複合施設。

22



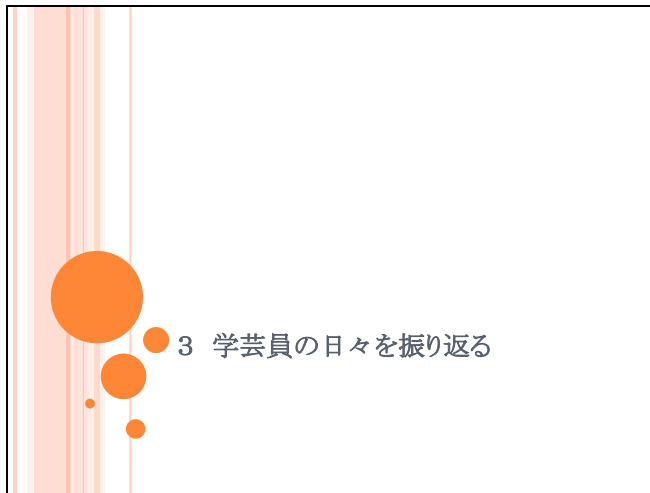
- 常設展示の様子。県の自然と歴史を総括的に紹介。
- 開館して 25 年になるがまだリニューアルされていない。予算が認められない。他所であれば 20 年も経てばリニューアルしているところが多い。
- 手づくりで資料やパネルの入れ替えをして新鮮さを出そうと努めているが、それにも限りがある。

23



- 収蔵庫。博物館は展示室のほかに収蔵庫が重要。収蔵庫は、博物館の心臓部でもある。

24



- ここまでが私がどんな所にいるかという前置きである。
- 次に私の日常の仕事を紹介する。

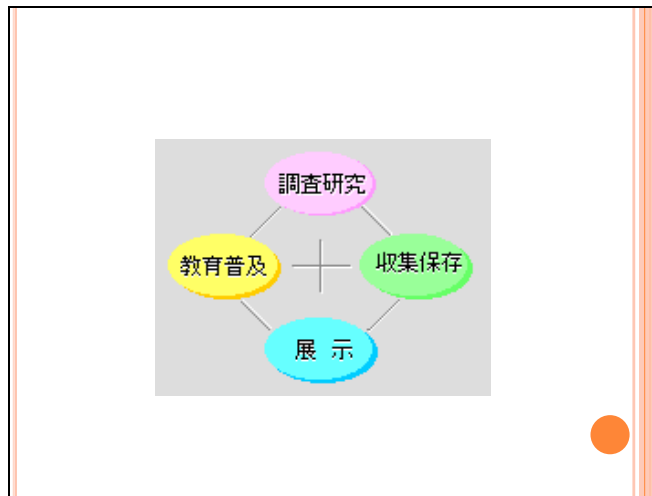
25

博物館と学芸員の仕事

- 博物館法
大まかには資料の収集保存、調査研究、展示、教育普及の4本柱
- 学術性をもったコレクションの形成・維持、それを基盤としたサービス
- 博物館の業務を担う総合専門職としての学芸員

- 世間には「博物館行き」という言葉があるが、博物館は要らないものを保管しているわけではない。歴史的文化的に意味があるから保存・展示している。必要でないものは博物館では受け入れしていない。本当に博物館に収蔵されるものは「殿堂入り」とよばれてよい。
- 学芸員は暇ではない。収蔵庫に籠っている番人ではない。

26



- 資料を集める、保存する、集めた資料を調べて研究する、その成果を展示する、一般の人たちにお話しをする。
- 私自身、機会があれば博物館の役割を話すように努めている。講演の依頼があれば原則断らない。このフォーラムもそのひとつである。
- 調査研究、収集保存、展示、教育普及が博物館の四本柱。このうち、前二者は博物館でしかできない。

27

入門の頃

- 初めての徳島
- 常設展の準備...阿波の史料への戸惑い
中世史料が少ない
→非文献資料への興味

- 最初に担当したのが常設展の中世のコーナーの準備。幅 6.6m の小さなもの。
- 全く白紙の状態スタート。
- 徳島県はもともと中世の文献史料の少ない所であること、古文書展示は一般に敬遠されることから、中世の発掘資料を交え、文献史料によらない展示を目指した。

28

歴担当 はせがわ けんじ **長谷川 賢二**
専門：中世史 博物館研究 余技いろいろ

調査研究

- ・修験道組織の形成と展開
- ・中世～近世の阿波の信仰と伝承
- ・近世～近代の阿波の史学史
- ・博物館における歴史展示の方法

普及教育

- ・中世史などに関する講座、「古代の乳製品をつくろう」などの体験活動、「一宮城を歩こう」などの見学を担当
- ・歴史、人権学習、平和学習の講演や出前授業も担当

展示

- ・主担当した企画展の図録勢ぞろい！

1993年 1994年 1998年 1999年 2000年 2008年 2010年

・その他にも、企画展「聖地★巡礼」、特別陳列「丹波マンガ 藍山の記録」「勝瑞時代」「旅と祈りの道」、部門展示「部落解放のあゆみ」「絵に見る中世」「兵士たちの戦争」などを担当

- 常設展示室に掲示している学芸員の自己紹介。
- 専門は、「中世史、博物館研究、余技いろいろ」としている。いろんな分野に手を広げる結果となっている。
- 私が主担当した展覧会の図録の表紙。図録を作らなかった展覧会もある。

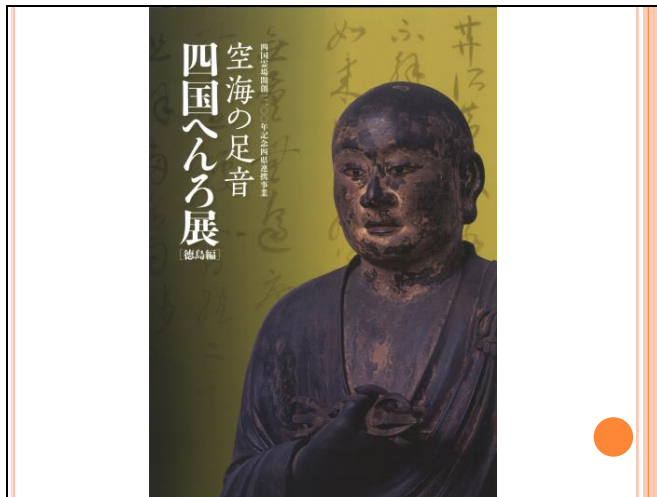
29

展示と研究対象の広がり

- 関心の拡散...修験道史→民衆信仰史・巡礼史、部落史、戦争、博物館史、地域史学史など
- 中世から近代まで
- 地域から立ち上がる歴史像構築の模索...自然史とのかかわり
- さまざまな人と資料との出会い、(再)発見
- 思い出深い展覧会
「祈り・のろい・はらい」(1993)
「人間に光あれ―被差別部落に生きた人びと―」(1994)
「郷土の発見―小杉樞郎と郷土史研究の曙―」(2008)
「海を渡った人形と戦争の時代」(2010)
「空海の足音 四国へんろ展〔徳島編〕」(2014)

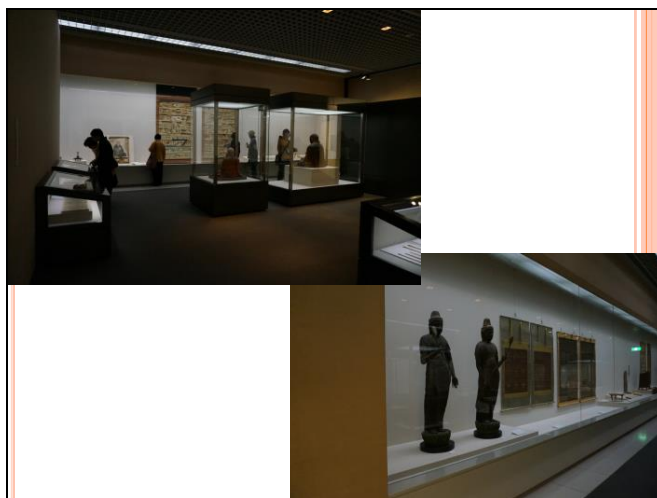
- ・ 古代から近代という時代区分を前提にするのではなく、徳島という土地に根差してきた歴史の流れ、事実をできるだけ掘り起こす。
- ・ 「祈り・のろい・はらい」(1993 年)は、タイトルが穏便でないため物議をかもし。
- ・ 「のろい」の次に差別問題を取り上げて全国的に注目。今では常設化。
- ・ 昭和 2 年に日米の人形交換。その人形の里帰り展示。海外と交渉。

30



- ・ 展覧会の準備はいつも大変であるが、WV で育まれた「理不尽さへの耐性」のおかげでなんとかやってこれた。
- ・ 昨年の「空海の足音 四国へんろ展 〔徳島編〕」の図録表紙。
- ・ 昨年何か月も休みがとれなかったのはこの展覧会のためである。

31



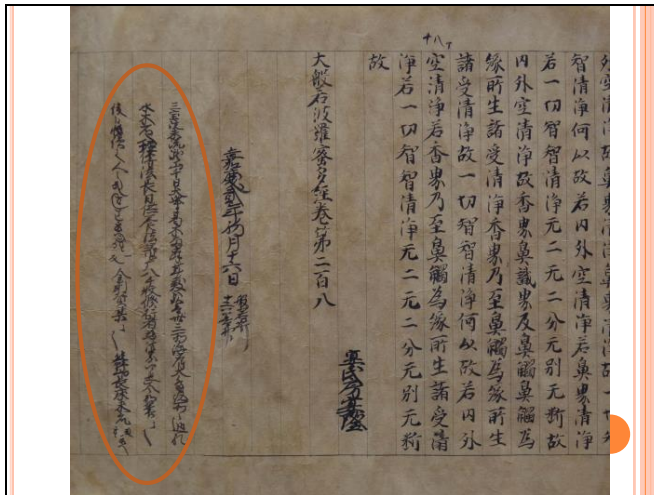
- ・ 「空海の足音 四国へんろ展 〔徳島編〕」の会場風景。オーソドックスな文化財展示。4室を使い大変だった。

32



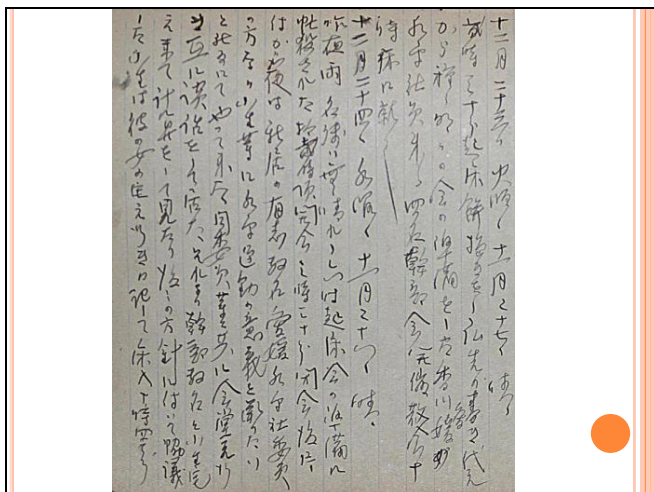
- つらい展覧会であったが、いろんな史料や人との出会いもあり、終わってみればやってよかったなと思う。このような面白さもあるからつらさに耐えていける。
- 江戸時代の巡礼者が背負っていた笈。あまり残っていないが、ある人から寄託され、その後寄贈された。
- 徳島には少ない。藍商人が諸国の情報を集めながら巡礼していたことがわかる。

33



- ある山奥の寺に残されていた大般若経。奥書きから遍路が修験道とも関わってきたことがわかる。修験道研究を専門とする私にとっては、是非ともこの展覧会で紹介したかった。
- 修験道の歴史を書き換えるような情報が含まれている。
- このような史料との出会いは学芸員をやっていなかったらありえなかった。

34



- 昨年は徳島に水平社ができて90年。その時の展示物。
- 徳島水平社の初期のリーダーの日記。組織立ち上げの頃が書かれている。
- 最初はこれを見せてもらうことすらできなかった。学芸員として信用されていなかった。
- 徳島水平社設立80周年（2004年）の時にようやく仲立ちする人もできて初めて展示にこぎつけることができた。

•この史料は、今は館に寄託していただいている。

35



- 化け物絵巻。20年ほど前に購入。
- 制作年代は不明であるが、原画は室町時代まで遡る。これまで知られていなかった場面も描かれており、新しい事例として博物館の研究紀要で紹介。
- 妖怪のデータベースをつくっている国際日本文化研究センターにも情報提供しているので、今後の研究発展に寄与できると思う。

36

博物館・地域と向きあう

- 1995～ 常設展リニューアル構想
- 挫折→常設展活性化への試行錯誤
- 部落差別

- 学芸員の仕事は、史料/資料とか研究ばかりでなく、それをベースにサービスをする。
- 博物館は社会教育機関。とくに公立施設は地域の人に使ってもらわなければならない。
- 私は当初、博物館はいろんなものがある面白い所、研究ができる所といった意識しかなかった。1995年の常設展リニューアル構想の検討をきっかけに博物館のあるべき姿を真剣に考えるようになった。

37



- どうしたら面白い常設展がつけれるか、その土地の良い面ばかりを伝えるのではなくて部落差別のようにしんどい部分も背負っていかないといけないと思うようになった。
- 博物館が地域とどのように向き合うか、それをどうやって発信し理解し、受け入れてもらえるか。
- ロビーに設けた、誰でも手に触れ遊べる量の間。博物館が楽しかったという記憶をもってもらいたい。

38

博物館・地域と向きあう

- 学芸員ネットワークづくり
...四国地区歴史系学芸員・アーキビスト交流集会 (1996～) → 四国ミュージアム研究会 (2007～)
- 徳島博物館研究会 (2000～2002、2004～×)

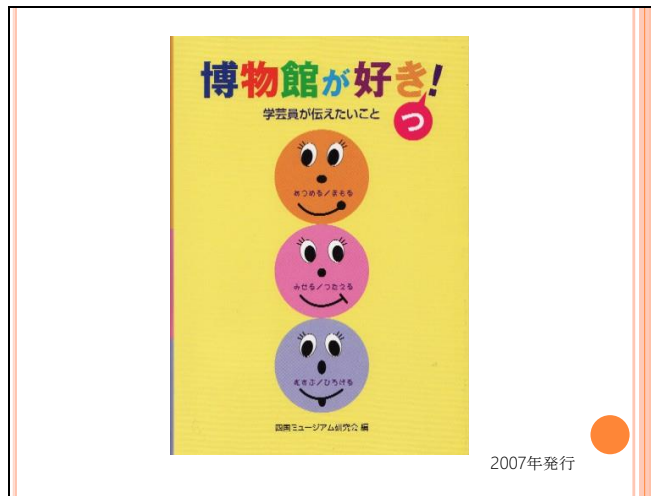
- 色々な博物館を訪れるうちに学芸員が孤立感で悩んでいることを知る。
- 学芸員がつながり楽しくやろうよ、と 1996 年に四国の学芸員に呼びかけ集まった。今は四国ミュージアム研究会となっている。

39



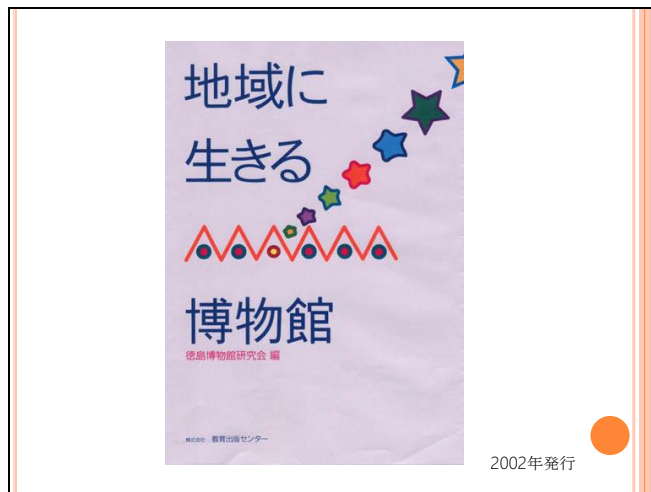
- 四国地区歴史系学芸員・アーキビスト交流集会 (1996 年)

40



- 四国ミュージアム研究会でつくった学芸員のエッセイ集（2007年）。今日ここに来る時に立ち寄った、難波のジュンク堂書店でも売っていた。

41



- 徳島の学芸員仲間で作った論文集（2002年）

42

博物館・地域と向きあう

- ボランティアとの協働による学習キット開発
...ポップアップや単レンズカメラなど
→博物館資料と子どもの距離を縮める
博物館独自の歴史学習のあり方を探る

- 学芸員だけでは堅くなる。博物館にはボランティアの協力が欠かせない。博物館を使っている側からの提案を受け入れながらやっている。
- 2005年からボランティアを公募。
- とかく敷居が高く、難しいと思われがちな歴史資料を皆で遊んでもらえるようにしたい。

43



- ママさん、高専の学生などに加わってもらって作った歴史の教材。徳島城の門のポップアップ。

44



- カメラのキット。徳島県出身の人類学者、鳥居龍蔵がはじめて調査にカメラを使ったことにちなむ。カメラづくりを通じて郷土の学者を知る。
- ワークショップで作り、写真を撮る。
- このカメラによる作品展ができればよいなと思っている。
- ささいなことではあるが、面白いことの仕掛けを皆の協力を得ながら考えるのが楽しい。

45

博物館・地域と向きあう

- 歴史資料保全ネットワーク・徳島（徳島史料ネット）の発足と参画（2012）

- 地域社会との連携についても頑張らなければならない。
- 県内の歴史研究者とともに歴史資料保全ネットワーク・徳島（徳島史料ネット）がつくられており、協力している（2012年）。

46



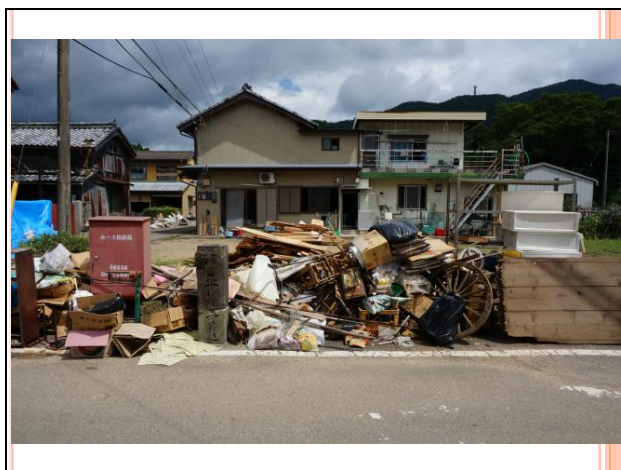
- 歴史資料保全ネットワーク・徳島（徳島史料ネット）は、南海トラフの大地震が近いといわれている中、大学の教員、博物館、文書館、文化財行政がネットワークをつくり、歴史資料が災害で失われるのを未然に防ぐ取り組みである。
- 写真は、同ネットワーク設立集会での鳴門教育大学の先生が挨拶しているところ。

47



- 昨年の台風 11 号による冠水。屋根だけ残したローソンの店舗。

48



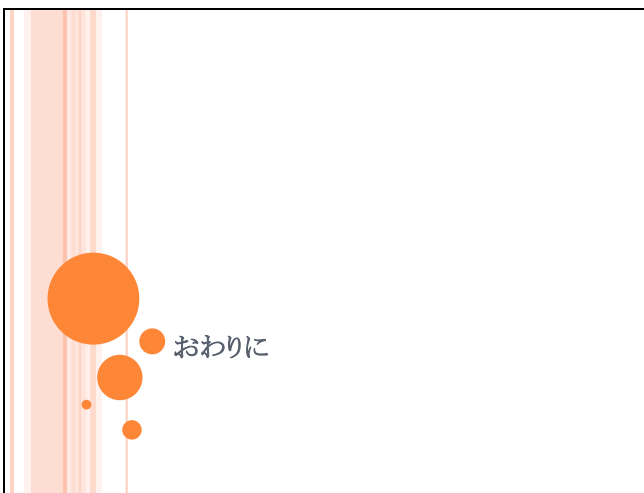
- 水が引いた後の片付け風景。
- 資料レスキューのために現地入り。
- 廃棄物であるが、私からみれば資料と思えるものも入っている。車輪は荷車の車輪。民具の一つ。
- 古い絵が貼られた襖がころがっていた。これも捨てられてしまうのだろうか。災害後の殺気だった雰囲気の中での保存活動は慎重にすすめなければならない。

49



- ある神社で水につかった古文書。ページが開かない。糊がくさってすさまじい異臭。博物館のほうで預からしてもらって冷凍している。最終的には器械により凍結乾燥させる予定。
- このように博物館は地域の記憶装置として頑張れるところもある。

50



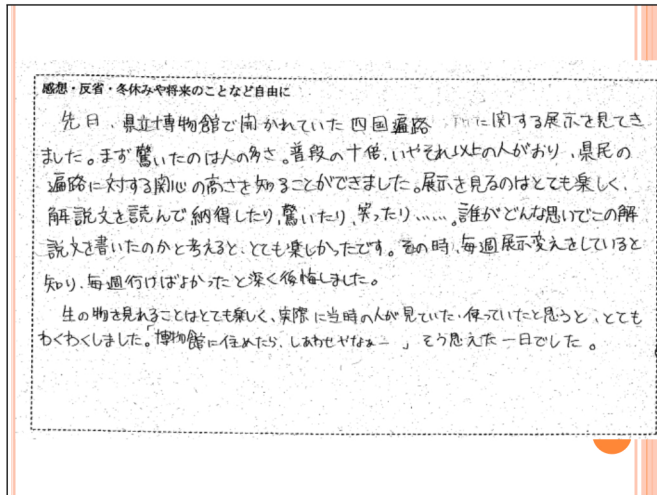
51

これからの歩き方を考える

- 「日本型学芸員」のメリット・デメリット
- 資料(もの)の大切さ、面白さ(背景にある歴史・文化も含めて)の伝道師として
- 修験道史研究の区切り、博物館や地域にある資料に即したテーマの楽しみ



- 日本の学芸員はいろんなことをしなければならない。
- 資料が大事であり、それらがもつ面白い歴史や文化を伝える伝道師として学芸員の務めを果していきたい。
- 研究の面では、WV がきっかけとなった修験道史の研究にそろそろ区切りをつけ、ほかの資料についてもっと発信していきたい。



- 「空海の足音 四国へんろ展〔徳島編〕」に訪れた後、高校生が学校に提出した感想文。
- 「生の物を見れることはとても楽しく、実際に当時の人が見ていた、使っていたと思うと、とてもわくわくしました。博物館に住めたらしあわせだなあー、そう思えた一日でした。」